

カンを養う

「カンを養う」

～指導者は真実を直感的に見抜くカンを養わなくてはならない～

日露戦争の時、名将といわれた黒木為楨大将が第一線を巡視していて、「今夜は奇襲があるぞ」というと、必ずその晩は敵が攻めてきたそうである。

なぜそれがわかるのかというと、特別な根拠があるわけではなく、なんとなくそういう感じがするということである。いうなれば”カン”であろう。

カンというと、一見非科学的で、合理的にこういうものだと言明するのは難しい。

しかし、それだけに一層、カンが働くという事が指導者にとってきわめて大事だと思う。

たとえばニュートンはリンゴの落ちるのを見て、万有引力を発見したといわれている。

リンゴが落ちるのを見たのは何もニュートンだけではなく、多くの人が目にしているはずだが、それを不思議に思う人はいなかった。

それをニュートンは「これはおかしいぞ、そこに何かがある」と感じたのだろう。それがカンである。

だから、指導者も直感的に価値判断できる、ものごとの是非がわかるというカンを養わなくてはいけない。

商売人であれば、一つの商品を見て、それが売れるかどうか、どれだけの値打ちがあるか一目でわかるというのでなくてはいけない。

売れるかどうかわからないが、まあひとつ売ってみようというようなことでは失格である。

このようなカンは、経験を重ね、修練を積む過程で養われていくものである。

そして、そういうカンの働きと、合理的な考え方とがあいまって、偉大な成果が生まれてくると思うのである。

(松下幸之助著 『指導者の条件』 PHP研究所 より抜粋)